

『若き日本文学研究者の韓国』 池田功著

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学政治経済学部 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池田, 一之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/10164

池田 功 著

「若き日本文学研究者の韓国」(武蔵書房刊)

池田 一之

冒頭に、今世紀初めロンドン留学中の夏目漱石がストレス解消にと、自転車買い求め、それ乗ったら頭の痛いのがなおったという故事を持ち出し、しかし、筆者は韓国三大自動車会社のひとつ起亚自動車の「プライド」(一〇〇〇〇)を四百万フォンで買って、韓半島を乗り回したと、胸張るがごとき一文がある。が、読みすすむうち、「プライド」はクルマ社会に生まれ育った筆者の異文化体験の足であり、できる限り多くの韓国の人たちと会い、コミュニケーションを深めようとする、はなはだ意欲的な要具でもあった。

筆者の池田功さんは、ある日、女性の恩師から電話で「君、韓国に行つて、日本語の先生しなさい」と命じられ、盧泰愚政権が登場した一九八八年、東国大学慶州キャンパス・日語日文学科の招聘特別専任講師として赴任する。以来二年間、国立慶北大学(大邸)の非常勤講師も頼まれたりして、たいそう忙しく暮らす。

中国でも同様だが韓国でも、日本人にとって、その異文化体験には、厳しいプラスアルファが常に付き纏う。だから休日、「ブライド」運転してのドライブにも豊臣秀吉の朝鮮出兵（壬辰倭乱）とか、三十五年間の「日帝時代」がしばしば行手に立ち塞がる。それは日本人以外の人間には遺跡・史跡であつても、筆者には昨日のこのように生々しく迫り、語りかけてくる。

大学のキャンパスも例外ではない。日本政治を専攻するという老教授が穏かな眼を筆者に向けて「皇国臣民の誓詞を毎日毎日、となえていました。天皇陛下のためにお祈りしました。そうすれば、必らず日本が勝つと言われまして……」、中学生時代の体験を披露する。そして「若い日本の先生、ぜひお訊したいですね」と侵略のこともや天皇制について意見を求めてくる。

卒論を夏目漱石にした教え子が「夏休みに全集読んだのですが、いやな感じがしたところがありました。『満韓とどこどこ』です。漱石にもあんな差別意識があつたことを知り少し残念に思いました」と。

『満韓とどこどこ』は漱石が日韓併合の前年一九〇九年秋、中国・東北と朝鮮半島を旅して東西の朝日新聞

に連載（五十一回）したものである。連載中には伊藤博文がハルピン駅で安重根に射殺されている。

このような対話になったり、あるいは「日帝時代」の史蹟を前にして、一九五七年生まれの筆者は、その度不幸な歴史の重みに戸惑いながら自問自答する。それが実に正直にこの本には書かれている。

△日帝時代を現在の日本人との連続性と共に、断絶性も、もつと理解してほしいものだと思わずにはおられぬ気持ちになった。「デハ、アナタハ ドンナフウニ、ソノダンゼツセイヲ、セツメイデキルト イウノデスカ」

日本には平和憲法があつて、戦争を永久に放棄しているんだ。

「ソノニホンガ、スデニ センゼンヨリ ツヨイグンジリヨクラモツテイル。ソシテ センゼンノ シンリヤクラ シンシュツト カキカエテ カコヲ ワスレヨウトシテイル、ソノ ワスレタコトガ ダンゼツナノカ」▽

若い「歴史を伴った日本人」筆者の韓国での行動がひしひしと伝わってきて、好感のもてる本である。

（教授・ジャーナリズム史専攻）